

層富

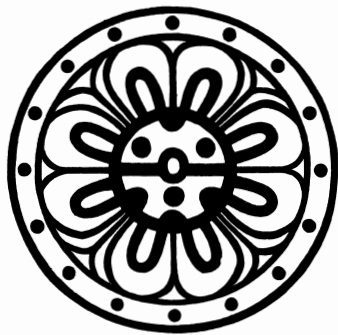
(川口 勇登)

会誌名「層富」(そほ・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春2月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

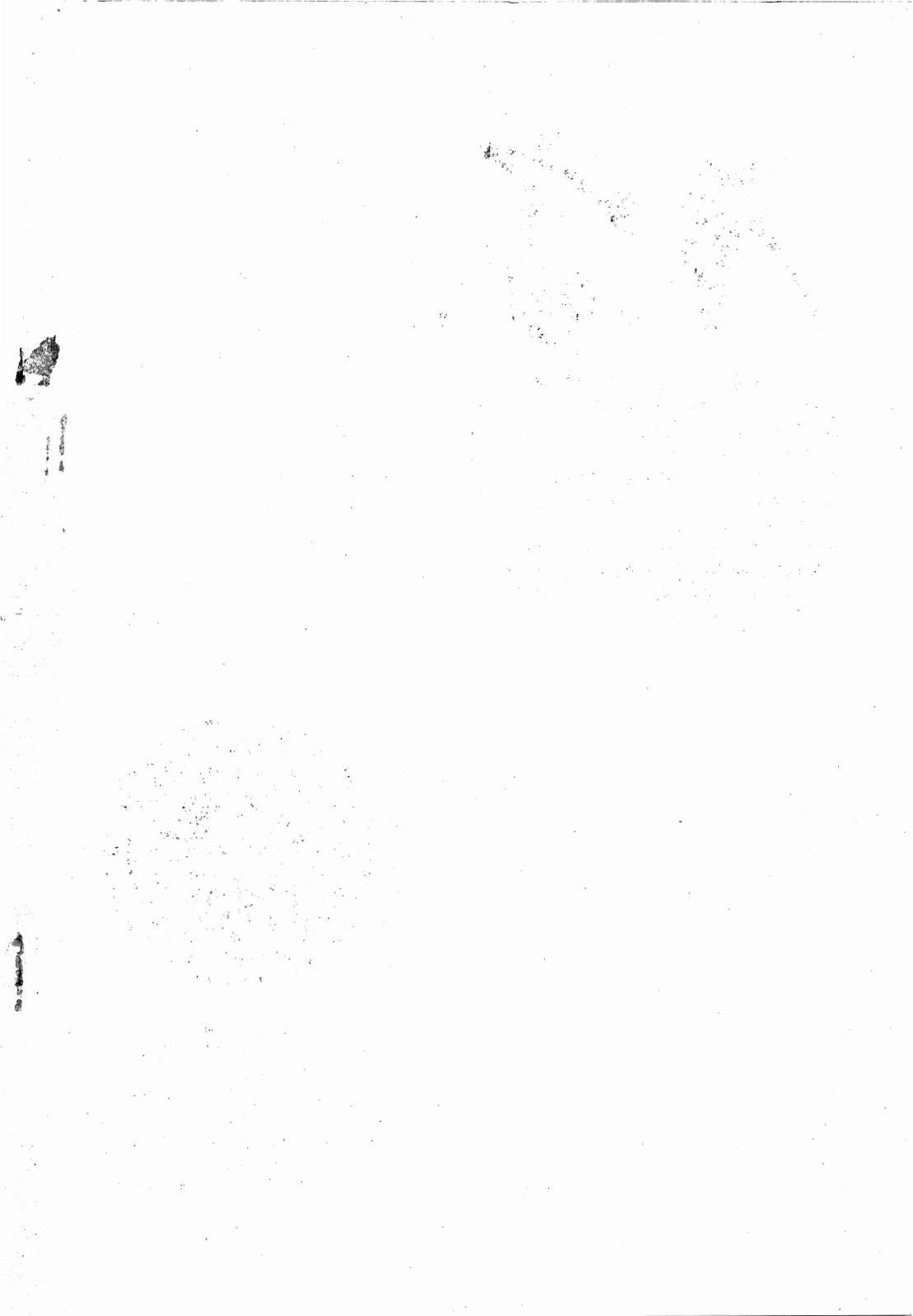
古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)





1986.4.20 文学散歩（大津市聖衆来迎寺）

「層富」第三号（一九八六）目次

層富第三号の刊行に寄せて	網干 善教	1
講演要旨「高句麗とその文化」	網干 善教	3
漢詩四題	片桐 一夫	6
平城ニュータウン文化協会に関するアンケート調査		
奈良女子大学家政学部住居学科 賀真田悦子		8
私たちの地域の周辺「地名の変遷をさぐる」 網干 善教		15
俳句		17
短歌		23
グループ活動状況		26
文化祭記録		44
一九八六年総会記録		46
文化協会会則		53
役員名簿		56
会員名簿		58

層富第三号の刊行に寄せて

テレビのコマーシャルを振っていえば、「買物籠を提げて文化協会へ行こう」とでもいいましようか、気軽な気持ちで講座、同好会などに参加し、地域の人たちと交流し、少しでも日常生活に役立つような会でありたいと念願しています。

平城ニュータウン文化協会は、新しい町づくりがはじまった十年程前から「住民の文化活動のできる組織をつくりたい」という強い要望の下に、三年前に自治会の積極的な取り組みによって結成された経緯があります。

ただ最近、住民の方の極く一部の人であろうと思いますが「文化協会は少数の趣味の集りだ」とか、「自治会とは何ら関係がない」などというような批判を耳にすることがありますが、そうではなく、むしろ会の創立の経過からみて、自治活動の一翼を担って発足したものでありますし、活動内容も、いろいろなことに関心を寄せ、趣味を大切に育て、生活をより豊にしている人の方が「無趣味」の間よりはるか充実した人生を送ることができると思います。社会の現役で忙しく働いている時は、そうしたことの必要性をあまり感じないでしょうが、人間は常にそうであるとは限りません。

社会には種々の会が組織され、運営されています。なかには会員資格に何名かの推薦をうけ、審査し、適当と認められた人しか入会できない会もあります。そういう会は往々に選ばれた人という特権階級の意識が底流にあります。

私たちの文化協会はそうではなく、住民あるいはここに勤務されている方であれば、誰でも、いつからでも自由に参加でき、活動し、勉強できる会なのです。

会を運営して下さっている方々、講座や同好会の世話をすすめて下さる方々、みんな何とかして、私たちの地域をよくしよう、そのなかで自分の人生をより有意義にしようと思ひ、奉仕的に活動して下さっているのです。また、ある会のように欠席者にペナルティーを課すこともありません。家の都合、体の都合によって参加できないことも多々あると思います。参加できるとき、一回でも多く来て下さればそれでよいのです。それは会のためではなく、自分自身の問題なのです。

しかし、文化協会のような目的と組織をもつ会は、せっかくなつくつても参加下さる方が少なくて、その目的を達成することができないのです。

本会も創立以来第四年目に入りました。この機会に会員の皆様に御願ひしたいことは、知人、友人、近所の方など、会の趣旨と活動の内容を紹介し、呼びかけて下さって、気易しく、気軽に仲間に入って活動の輪に連つていただきたいということです。

私たちも、現役であり、仕事の上でも、社会的にも忙しい日々を送っています。それにつけて会の運営に十分果すことができず、会員の方々の不満もあるかも知れません。しかし、暇つぶしにやっているのではあまり意義はなく、むしろ忙しい人が何とかして時間を割いて頑張っているということに文化協会の活力があると考えます。

これを機会に今後も御支援の程をお願いします。

平城ニュータウン文化協会 会長 網 干 善 教

六〇年度総会記念講演要旨

『高句麗とその文化』

網 干 善 教

交通や通信機関が発達していなかった古代、島国である日本はどうしても世界文明の発展から遅れがちであった。そのため中国や朝鮮半島をルートとして直接、間接に文化の受容を積極的にすすめた。そうしたことから日本文化のなかには、朝鮮半島を経由して導入したものが多く見られる。

古代朝鮮半島では三国が分立していた時代があった。

北の高句麗、南西の百済と南東の新羅である。そのうち高句麗は現在の中国東北地区（旧満州）に起った扶余族が、松花江から長白山を越え佟住江、さらに鴨緑江中流の輯安へと進出し、さらに四二七年平壤に遷都した。この間盛衰はあったものの、輯安から平壤時代にかけて勢力をもち、高句麗文化が繁栄した。私が関心をもつのは

この時代の宮跡、仏教寺院跡と壁画古墳である。

今回、日本学術文化代表団の一員として招請をうけ平壤に赴き、古代における日朝文化の交流にかかわる遺跡や文物を見ることができた。

宮跡では大城山城と安鶴宮跡、大同城、寺院跡では定陵寺跡と真珠池、壁画古墳では徳興里古墳や江西三墓をつぶさに見た。

高句麗の宮都には、いわゆる朝鮮式山城といわれるものがあるが、その代表的な一つが大城山城で、その麓に安鶴宮がある。大城山城では山の尾根に延々と城壁がめぐり、安鶴宮は広大な敷地に、壮大な宮殿が造営されていたらしく、建物跡らが発掘調査された。

高句麗の伝承によれば、建国初代の王を「東明（聖）

王」という。平壤に遷都した際、その東明王陵も平壤に移した。そして王陵の前に定陵寺という寺院が建立された。現在建物は何も残っていないが、総面積約三万平方メートルの敷地で、寺院の中心をなすのは中央部に建立された八角形建物で、その三方に堂宇を配し、一塔三金堂の様

式であるという。私は実際に定陵寺跡を見学して、いくつかの疑問をもった。それは中央の八角形建物が、八角層塔なのかそれとも法隆寺東院夢殿や五条栄山寺のような八角堂かということ。飛鳥寺でもそうであったように中金堂と東西両金堂

高句麗の領土
(ca. 600)

0 100 200km



を比較すると規模や構造が違うのと同様に、定陵寺においてもかなりの相違が認められるから、果して「金堂」かどうか。さらに八角形建物と中金堂の間に回廊があること。また回廊の柱間の随所に広狭があること、八角形建物の中軸線と南にある門の中軸線が合致しないことから建立の時期に前後の時間的差があるのかどうかといった諸々の問題であつた。

定陵寺跡の詳細な発掘調査報告書は刊行されておらないから、現在のところ疑問としておくより仕方ないが、高句麗と日本の文化史関係を考察する上で重要な視点とすることができると考えた。

徳興里壁画古墳は一九七六年に発掘調査され、石室の全壁面に壁画が描かれていたことで話題となつた。この古墳は石室内の墨書銘によつて、鎮という人の墓であり、永樂十八年(四〇九年)陰曆十二月二十五日、七十七才で死去したことが判明している。

古墳の構造は日本的にいうと前室をもつ横穴式石室で、壁画は多くの題材をもとに描かれているが、そのうち関心がもたれるのは、彦星(牽牛星)と織女星が天の川を隔てて描いた七夕図である。

案内していただいた考古研究所副所長であり、この徳興里壁画古墳の発掘担当を担当された朱栄憲氏と高松塚の発掘を回想しながら話し合つたことは極めて有意義であつた。

徳興里古墳から約三軒西方にある江西三墓の大墓と中墓は四神図を描いた壁画古墳として有名であるが、特に大墓の玄室奥壁の玄武図は高松塚の玄武図との比較で非常によく知られている。かつて写真でしかわからなかつたが、実見してその迫力のあることに驚いた。天井の持送りの梁にも多彩な壁画があつて、さらに研究をすすめる必要性を感じた。

帰途、平壤から国際列車に乗つて北京へ、北京から成田空港経由で大坂空港まで二泊三日の一人旅であつた。国際列車は平壤を正午発車し、新義州で出国、鴨緑江を渡つて丹東市で入国、沈陽(旧奉天)、天津を通過して北京まで、車中一泊二十二時間を要した。午前十時北京に着き、午後北京空港から出国というハードスケジュールで、旅馴れているというものの、成田に着いた時は、疲れが急に襲つてきたという感じがした。

(当日はスライドを上映して説明しました)

【漢詩四題】

平城傷春

片桐 一夫

五月平城萬綠稠
李花繚亂咲南丘
何忘往歲阿兄訓
滿地芳芬撲別愁

五月の平城、萬綠稠く
李花繚亂と、南丘に咲ふ
何ぞ忘れん、往歲阿兄の訓
滿地の芳芬、別愁を撲つ。

曾遊北京(西苑)

北京城外野鶯鳴
西苑梅花香氣清
憶得江南趙家女
玉釵璨璨一枝呈

北京城外、野鶯鳴き
西苑の梅花、香氣清し
憶ひ得たり、江南趙家の女
玉釵璨璨として、一枝呈めしを。

曾遊北京（北海公園）

小白塔辺飛燕鳴
梳粧台上午風輕
五竜北海水亭夏
滿目荷花清更清

詠史（遣唐大使、離唐）

風繚大旆陽関起
潮映征帆打纜遭
漢土東涯舊時海
遣唐卿相上竜艘

小白塔辺、飛燕鳴き

梳粧台上、午風輕し

五竜の北海、水亭の夏

滿目の荷花、清更に清。

風は大旆を繚して陽関起り

潮は征帆を映じて纜を打つて遣る

漢土の東涯舊時の海

遣唐の卿相竜艘に上る。

「平城ニュータウン文化協会」の各講座・

同好会に対するアンケート結果報告

奈良女子大学家政学部住居学科

報告者 賀眞田 悦子

調査対象 各講座・同好会リーダー

回収数 一九グループ中、一六グループ

調査期間 昭和六〇年七月一八日～九月一五日

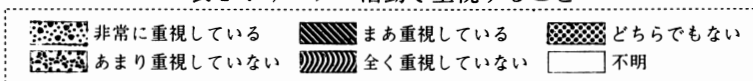
この報告書は、奈良女子大学家政学部住居学科の学生から卒業論文のテーマに平城ニュータウン内における住民のコミュニケーション活動をとりあげ調査をさせてほしいという申し出が会員の大浦さんを通じてあり、スポーツ協会とともに協力することにしました。

このほど、その結果報告書が大浦さんあてに届きました。執筆者の了解のうえで「層富」第二号に掲載させていただくことにしたものです。

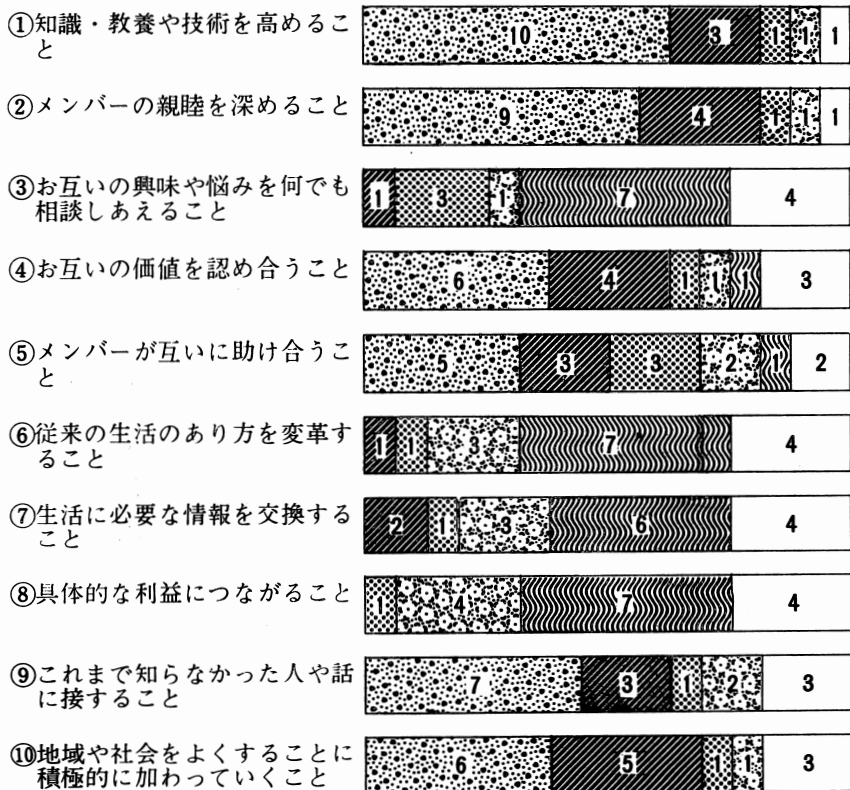
一、サークル活動の目的

「知識・教養・技術の向上」、「メンバーの親睦」、「地域社会への貢献」等が重視されており、逆に「具体的利益」、「生活の変革」等は重視されていない。知識・技術を向上させながら地域住民間の親睦を図ることは大切だが、一方、個人を尊重し、自分の生活を変えない程度にやっついでいこうという姿勢がうかがえる。

表1：サークル活動で重視すること



(サークル数)



— 16サークル —

二、サークルの場

―北部出張所会議室― に関する空間的要望

アンケートにご協力頂いた一六サークル中、不明の一サークルを除いた一五サークルが、活動の場として北部出張所会議室を利用している。この会議室の「利用、管理」については、一六サークル中、一四サークルが「使いやすい」と答えているが、「空間的要望」について満足しているのはわずか三サークルだけで、何らかの要望をもっているのが一二サークルもあつた。具体的には、「公的施設の増加」、「広いスペース」「整った設備」等が挙げられており、公的施設の数の少なさと狭さに不満を抱いているサークルが少なくない。

表2：北部出張所会議室に関する空間的要望（複数回答）

要 望	サークル数	具 体 的 事 項
1. 特になし	3	
2. 個所を増やして欲しい	6	
3. 広い場所が欲しい	4	
4. 設備を整えて欲しい	3	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオに関する設備 ・印刷室 ・炊事場
5. その他	4	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の配置を良くして欲しい ・畳の間に窓をつけて欲しい ・看板を出して欲しい (場所がわかりにくい) ・北窓のある部屋が欲しい (絵画の会)
6. 不明	1	

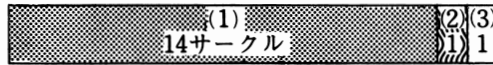
四、行政とのかかわり

行政からの援助・

サービスの（北部出張所の無料使用も含む）を受けているサークルは、一六サークル中、一五サークルであった。また、活動に対する行政の役割としては、一四サークルが「行政は施設や場所の整備をするだけでよく、あとは住民の自主性にまかせるべきだ」と答えている。

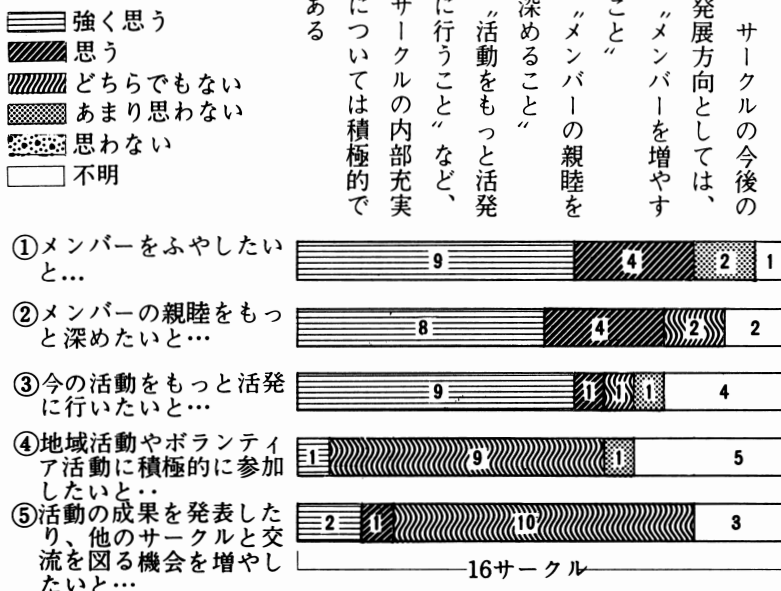
表4：〈活動に対する行政の役割〉

（地域における住民のさまざまな活動に対して行政はどのような役割を果たすべきか？）



- (1)行政は、施設や場所の整備をするだけでよく、あとは住民の自主性にまかせるべきだ。
 (2)行政は、施設や場所の整備をするだけでなく、情報提供・指導者の派遣プログラムの提供など各種のサービスを行い、住民の運動を側面から支援していくべきだ。
 (3)行政は、施設整備や各種サービスだけでなく、活動の内容やあり方についても援助・支援するべきだ、

表5：サークルの今後の発展方向



五、サークルの今後の発展方向

六、現在の活動に対する問題点

現在の活動に対する問題点・困った点としては、大まかに分類して、場所、メンバー・行政に対する内容であった。

まず、場所については、施設の量的少なき、狭き、設備の悪さ等が挙げられていた。メンバーに関しては、「若い人が少ない」、「男性に地域社会に出て欲しいので日曜に活動しているが効果がない」、「メンバーを増やしたいが先生の負担が重いので無理」等であった。

最後に行政については、「費用が不足しているので援助してほしい」ということであった。

平城ニュータウン文化協会に

ついでのご感想

—実際に講座に参加して—

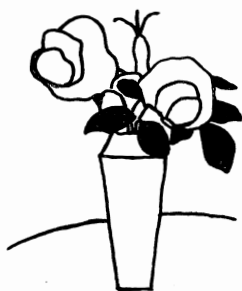
賀真田 悦子

「うつゝ、ハイレベル」これは、古代史講座に出席させていたでいて、まず感じたことである。なんといつても「木簡? 木簡って、日本史の時間に出てきた、アレかなあ」という程度の知識しかない私なのだ。鬼頭先生の講義自体は大変わかりやすく良かったのだが、最後の質問の時間になると、高度な質問が生徒側からポン飛び出してきて、私はもうどぎまぎしてしまった。

調査をはじめたばかりの頃、「一度、古代史講座に出席してみませんか?」と大浦さんに誘われ、その時は正直言つて、「そのあたりのカルチャーセンターと大して変わらないだろう」などと、高をくくっていた私だった。しかし、自分が実際に出席してみても、生徒の皆さんがよく勉強していることに感心し、また、俗にいう「暇つぶしのサークルでもないこともわかった。古代史講座だけでなく、歴史教養講座にも出席させていただいたのだが、

生徒の皆さんの熱心さには、本当に驚かされた。(学生の私が恥かしくなるくらい)

講師の方々のボランティアによって文化活動を通じ、住民間のコミュニケーションを図るという文化協会の活動は大変すばらしいことだと思う。特に、何よりも住民の自主的活動であることがその評価を高めている。まだまだ、全国的にこういった活動は少ない。けれども、少しでも活動に接した者として、これからも活動の輪が広がり、さらに発展されることを期待したいし、また、そう願わずにはいられない。



私たちが地域の周辺(一)

—地名の変遷をさぐる—

網 干 善 教

それぞれの土地には長い間に刻まれた人間の生活の歴史がある。そして、その地を表示するために地名が生れた。山や川、森や林など地形や環境にちなむもの、鳥や獣などに由来するもの、そこに住んだ権力者の名を付したものなど、いろいろの条件のもとに名称が生れた。したがって地名は単なる符号ではなく、文化の遺産である。

一方、政治のしくみの組替えや、戦の勝敗などによって、属する範囲や名称の変更もしばしばあった。そのたびに在来の地名が消滅し、新しい名称が付されたこともある。そうした意味で、地名は不変のものではないが、消え去った地名も、その土地の歴史として、また伝承として何百年、何千年でも伝えられていく。

私たちが住んでいる平城ニュータウンの辺りでは、どのような変遷があったのだろうかを考えてみたいと思う。現在の奈良県は「倭」や「大和(やまと)」などと呼ばれていたことは周知のことであり、いまもこの名称が使

用されている。その倭には六つの県(あがた)が設けられていた。これを「倭六県」といわれている。平城ニュータウンの周辺は、そのうちの「添(そふ・そえ)の県」であった。この「そふ・そえ」という表記は「添」のほかに「層富」や「曾布」とも書かれた。

『日本書紀』神武天皇即位前紀二月二〇日の条に「層富県」とあり、『延喜式』の「祈年祭祝詞」には「曾布御県」という呼称を用いており、『正倉院文書』の天平二年「大倭国正税帳」には「添御県」とある。

私たちが平城ニュータウン文化協会の会誌『層富』は古代のこのあたりの地名を生かし、それを顕彰する目的をもって命名したものである。しかし「そふ・そえ」の一般的な表記としては「添」の使用が頻度としては多かった。「添県」であったことを伝えている事例としては神社名によっても知ることができる。

平安時代に著わされた『延喜式』のなかの「神名帳」を繙くと、大和国に「添御県坐神社(そえのみあがたにいます神社)がみられる。ところが現在この社名をもつ神社が二カ所にある。うち一社は歌姫の町の比端(平城宮跡から歌姫を抜けて平城ニュータウンに通じる歌姫街

道の西側)にあり、他の一社は奈良市三碓町(近鉄富雄駅の東南、帝塚山大学のある付近)に鎮座する。この両者のどちらが延喜式神名町記載の神社であるのか。また同一社名の両社がどのような関係にあったのかについては明確でなく、諸説がある。

それはともかく、両神社共に「添」の地にあることは間違いない。というのは「添」というのは天理市から奈良市、生駒市、生駒郡をふくむ広範な地域だからである。

この広範囲の「添」は大化改新による国郡の制度の施行によって「添上」と「添下」に分割された。このとき平城ニュータウンの周辺は「添下」に属した。『和名抄』によれば「曾不乃之毛(そふのしも)」と読んだことが知られる。「添下郡」が最初にみられるのは『日本書紀』天武天皇五年(六七六年)四月四日の条の「倭国添下郡」であり、添下郡は「村国」「佐紀」「矢田」「鳥貝」の四郷からなっていたことが知られる。私たちの住んでいる地域はこの四郷のうちの「佐紀郷」に属していた。

ちなみに「村国郷」は現在の大和郡山市高田町のあたり、「矢田郷」は同市矢田町の周辺、「鳥貝」は『和名抄』では「止利加比(とりかひ)」と読ませているが、この「貝」

は「見」の誤記なのか、それとも「貝」が「見」に変化したのかに問題がある。江戸時代に編纂された『大和志』によれば「鳥見庄」とあるが、もっと古い『続日本紀』の和銅七年(七一四年)十一月四日の条には「登美箭田二郷」とあって、「箭田(やた)」は現在の矢田のことであるから、奈良市の西部は奈良時代には「登美」とも呼ばれていたことが知られ、今の「登美ヶ丘」の地名の由来となっている。「登美」は「鳥見」であるから「貝」は「見」であろうとする説が有力である。

「佐紀」が添下郡であったことは、聖武天皇の皇女で、後に孝謙天皇、重祚して称徳天皇とられた高野天皇が崩御された『続日本紀』の宝亀元年(七七〇年)八月十七日の条に「高野天皇を大和国添下郡佐貴郷の高野山陵に葬る」とあることによっても知られる。この高野山陵は近鉄平城駅の東南近くの山陵町にある古墳(問題はあなが)に比定されているから、この辺りも佐貴(佐紀)郷であったことが知られる。

なお、添下郡は明治三〇年四月一日の改正によって平群郡と併合し、生駒郡となり、添下郡の名称は消滅してしまつた。

(つづく)



俳句

牧野春駒

峡空に切れし北斗や地藏盆

温泉の流れ貫く村の盆支度

伐りし竹すこし滑りてとどまれる

雪吊の天辺にあり蝶結び

卸したる雪に近くて書見の灯

左義長の海へ倒るる日く吉

植木鉢截せしもあらぬ茎の桶

灌仏の暁に獲れたる大まんぼう

流し雛てふてのひらにかろきもの

夏被舟よりおろす赤ん坊



松岡令澄

話すたび指輪光りて春燈はるとう

残暉ざんかにまだ春耕の人立てる

風を得て罌粟けしやうやくに罌粟らしく

舗装路の尽き春泥の径みちとなる

新築の家吹き抜ける若葉風

永谷秋乃

蜻蛉せいてんのいつか居らざり風ばかり

蠅おとこばちの止みて子はまだ泣いてをり

蓑虫みのむしの雨の雫しずくを見てをりぬ

老の餉けの秋刀魚あきばち一匹あれば足る

老いし身は低くもの干す桐の花

木村長子

永原寛子

新しき眼鏡をかけて齊打なりつ

梅もどき紅の一顆かもこぼさざる

水澄みし鞍馬くらまに赤き石拾ふ

蟪蛄ちゆうこのまだ枯れきらず芥かを研ぐ

みちのくへ今日は去いぬてふ明易あきやすし

白魚しろいその小さき眼ある朝餉あさけかな

菜なを茹ゆでて春の深ふかきにほほふかな

祝いわひ膳ぜんうす味花あじはなの誕生日

簾すだ草蓀くさたんのおもちやのかくしあり

庭にわを掃はく母ははせし如ごとく眞ま眞ま綿わた

廣田 春

柏木一枝

庭石に雨水溜り百合の花

くさぐさの野菜八瀬より盆用意

久しぶり風炉の点前も誕生日

春の川添ひに外燈いまでもる

淋しさも悲しさも雪解けてゆき

車椅子いつか踊の輪の中に

首を振るねんねこの子の帽深く

赤飯の礼一枝の梅を添へ

鳥の声連翹の黄のあたりより

夫婦して塗りたる畦の弧をなせる

喜多まさ

川口シズエ

鞠作り五重塔へ朝日来て

言ひかけてあとふと忘れ柿をむく

二百段登り御陵冬日さす

屠蘇の酔老の頬にも見えにけり

矢車のただ廻りある忌日かな

濃紅葉に運ばれ来たる喜寿の膳

盆栽を雪に倒せし猫らしき

竹の子をどすんと置きてもたらしぬ

なら山の夏鶯に針運ぶ

ひとりごと言ひて通りし日今かな

平井咲子

曼珠沙華一本もちて美容室

毛糸編むうしろに誰かゐるやうな

小豆粥老いての後は穂やかに

日曜の時計の音も春隣

吉野へと葉桜の駅いくつ過ぎ

森村和枝

知らぬ子の靴紐結ぶ草の露

葱刻む隣室の咳絶え間なく

待合室より見えてゐる路の蓋

焼野あり替の町を通り抜け

転校の手続も済み木の芽雨

中村君代

聞病の幾とせ経たるお正月

啓蟄の鯉も目覚めてゐたりけり

鈴懸の花に囲まれ母校あり

山盛りの籠の無花果頂きぬ

線香の匂ふ仏間の冷やかに

三井サチ子

金色を豊かに寝釈迦山の寺

寝釈迦見て冷えし身体を蕎麦処

初成りの小梅に塩のあらあらと

梅雨空に一願一打の響きあり

喪の家や色づく枇杷に雨しづく

西山 佐代子

坂本 よしと

土手下の産土神に梅雨の蝶
月食のすすみてりラの花匂ふ
海棠の花うつむきて訃報あり
恋猫の塀とび越えし鈴の音
蒸湯に柿若葉もれくる陽あり

白子 明子

雨の中今ひらきたる三つ葉摘む
大野寺のしだれ桜を今年も賞づ
まさぐりて青梅摘みぬ目を病みて
青梅を洗へば母を思ひけり
牡丹雪降る日セーター編み上る

散華拾ふ玉砂利ほのと暖かく
旅重ね辛夷咲く家に戻りけり
杏の実落ちて人なく寺の庭
梅雨晴や印度の僧に出会ひけり
墓洗ふ孫に背丈を越されけり

小田 年子

梅に訪ふ寺門閉しぬかたくなに
草の芽の名前繰りつつ庭掃除
齋の膳桃の一枝を添へありぬ
落椿その時叔父の訃報聞く
雨粒の紫なりし花菖蒲

越智恵子

砂山に母を待つ子の風車
菜の花の陽に伸ばしたる茎長き
矢車草やぐるま簪として撮られけり
葉桜のもらす光のみな青し
根分けして水をやる鉢一列に

牧野和代

母逝おときてよりの日数や稲の露
耳みみよりな話に通草かきくさはぜてあり
塗ぬり畦しづに草起き上る夕かな
桃ももすする平城山に月欠けゆけり
前髪まへかみに傷はかくれて袋掛

牧野友美

雲雀ひばり野を来て門柱の古りてあり
濁流にごりにのみ込まれたる早桃見し
露草つゆぐさに眠りし犬の尾のとどく
竹の根の見えて妃陵ひらの冬菜畑
寺の礎いし一段ごとの牡丹雪



美しき理念

左門 璃晃

若杉のほひたつまで天を指すひとつ啓示のありと思はむ

火のごとき孤独うたへる歌人にはほど遠くして何孤独の血ぞ

演奏者の個性のエキス裝飾句の虚飾にあらぬ生粹を聴かむか

ぬばたまの闇に暗渠の音流る足下より来る不定を抹殺す

とほき生命もち直したると聞きしかど夕かぜ重き湿りを運ぶ

漸くに若き紫陽花つゆけきも色いまだ出でぬを妻は活けたり

背景は説明するに及ばずやいま梅雨雲に隠れゆく夕日

はらわたの煮えたぎることも経験し人とし生くるあはれは知りき

有は無に通ずと云ふを思ふときも原子核つね炸裂しぬむ

うつくしき理念のかなたに美しき銀河ながれて宇宙は遼し

地底の雫

大浦 小枝子

生れし児の澄みしその腫よ穢れなき地底の雫水晶となりて

乳香児より脱がせる沓下その足の右と左の形のこれる

みどり児の空掻く両の手にぎりあふ時ゆ祈りの心宿るや

沈みゆく夏の太陽その朱に現の生きを映してみたし

「かなしみは明るさゆゑに」を口ずさみ陽の照る道に樹を求めゆく

言の端

岡田 越子

あでやかなる花々のかげに見えもせて春蘭の花ひそと咲きをり

留守がらにかへりみる間もなき庭にたわわに咲きて菊の香の満つ

すいすいと鉄骨の上わたりゆく工夫の姿秋空に浮く

恋ひわたる玉鬢の能楽に目がしらあつくしばし酔ひしれ

恥知らぬ人と思へど言の端に男心のつらさを知りぬ

化粧

木庭 和子

うつうつ蒼白き頬に紅させばひととき華やぐ女心よ

甲斐なきを知りつつ尚もバツクせり老に抗ふ五十路をかしき

夢に逢ひし人の声音を憶ひつつ頬のほてりを化粧にかくしぬ

心ばえをうつす鏡のありてほし化粧にまぎらふさままぎまの性

誰がためによそほひならむ眉ひきて鏡に向ひ一人し笑むは

蟬しぐれ

久門 富美

信号を待つ束の間も街路樹の蔭をもとめて夏午下がり

枝枝に首夏の風立ちさみどりの輝きうけて一樹なるわれ

極楽へ通ふ道かと花びらの散り敷く坂に立ちどまりたり

七夫に似る顔の一つは在さむと五百羅漢を秋日に訪ふ

ふかぶかと礼してゆける人の名を思ひ出だせず蟬しぐれ聞く

夏されば

玉置小代

銀のすぢ

宮川 恵美子

病室に白きギブスの吾子あれば庭の草花荒るるにまかす
縁満つ女人高野は静まりて釈迦牟尼仏のやさしく坐す
姉二人と連れだち登る石段は幾千万の祈願にくぼむ
朝顔を育みぬたる若者の燃ゆる生命消ゆ花咲きし日に
夏されば現にきこゆ逝きし甥のニコンを提げて訪れくる
声

簾は間に吸はれて一条の道に自販機あかあか灯す
冷えびえと風に虚空の声まじへ夜の窓より冬雷とよむ
虚ろなる老犬の背は艶失せてあらだつ毛並に夕光うすき
神苑の池濁りゐてゆたゆたと泳ぐともなき鯉の背の見ゆ
臘梅の青葉に蝸牛あそぶがに遅々と画ける銀のすぢ

金 婚

永田喜一郎

愛

山元洋子

暗黒の中を模索す視野計に一点凝視ひかり求めて
眼帯に視野は半減片目ではわが人生もせまくなりたり
山焼きを見ての帰りにそばやに入りバス待つ暇にきつね
一ぱい
市長つぐ祝賀の酒に金婚のもろびとたちは満悦のてい
格調も高く金春祝儀能「野守」にただ酔ふ金婚の人びと

三十年経て噂に君の名をきけば別れし冬の停車場の頭つ
ふるえつつ小さき部屋に火を囲みふるえしままに君と別
れし
雨なれば雨に戯れ晴れの日は太陽に戯れて子ら育ちゆく
大き目の靴子に買いぬ来ん冬も来ん来ん冬も育つと思え
ば
長きまつげかすかにゆるるよ幼子は狸寝入りにななしみ
もあらん

グループ活動状況



読書グループ 文学散歩 (大津市坂本 盛安寺院)

歴史教養講座

人生のうち児童、生徒、学生の時代は教室でいろいろな知識を教えてもらうことができます。ところが卒業するとそうした知識を与えられる機会が非常に少なくなります。その間に社会は変化し、歴史的意義も忘れ去られがちであります。そして自分に対応できないまま、日一日と過ぎてゆきます。

そうしたなかで、自分の生活の周辺にある様々な事象が、どのように継承され、今日の自分の生活に生かされているかという歴史的由来を、教養として、知識として身につけていただくという目的の講座です。

開講以来すでに四年目、毎月第二火曜日、午前、殆んど休むことなく続けてきましたし、これからも延々と続けるつもりです。

テーマは「古代天皇の系譜」というむつかしそうな題ですが、まだほんのはじまりのところです。いつからでも参加できますし、内容もむつかしいことはありません。

講座風景は、時には大声で笑いながらの勉強だと思っています。

会場や設備の関係もあって最終的には八〇人程度が限度でしょうが、毎回六〜七十名の方が参加して下さっています。女性の方が多いですが、最近男性の方も多くなりました。

「どんなことをやっているのかなあ」と一度会場に来て下さればよいと思います。せっかく奈良に住んだのだから少しでも奈良のことを知る機会でもあります。

(網干 善教)

中国語講座

広大な土地の自然、庶民の生活と歴史、中国へのあこがれから、その国のことばに、興味を覚え、この講座に入って二年余り。未だに、入門編からぬけ出せない私です。

先生の中国語を聞いていて「しまった。耳そうじを忘れた。」こんな思いをすることが、何度もありました。い

くら耳をそうじしたところで、先生のことばが、すんなりと私の中に、入ってくるきざしは、ありません。悪いのは、耳ではなく、さびついた頭脳ですものね。

でも、あきらめないで、少しずつ新しい単語という油を、注ぎ込んで来ました。時には「連想ゲーム」のように、聞きとれた一つの単語から、あれこれ連想するので、あたれば「ピンポーン」という調子でね。

いつまでも、カンを頼りにしては、熱心に指導して下さる先生に、申し訳ないと思い、少しでも、応えられるように、頑張っていくつもりです。

こんな私達も、四月のある一日、ちよつとした劇をしました。演し物は、「中国旅行」メンバーの一人が、脚本を書き、全員で演じました。観客は、下条先生と、久富木先生のお二人です。今までの勉強の成果を、

タクシーに乗り、買物、食事をしたり、万里の長城にも行きました。正確な発音？ 度胸と演技力で、大変好評だったと、自画自讃しております。

そして、次の目標は、本当の中国旅行です。

(久富木幸子)

読書グループ

読書グループ活動がまだ充分理解されていないようなので少し説明してみましょう。

読書グループとは、「読書という活動を機縁として結びついてできた人々の集まり（集合体）である」といえましよう。

グループの活動としてはいろいろ考えられますが、その中の一つに読書会があります。文化協会の読書グループは、月一回の読書会（例会）を中心な事業として運営しています。

例会は、会員全員で相談して決めたテキスト（主として文庫本の文学作品）を次回の例会までに各自読んで、例会のときみんなで作品に対する読後感を話し合うのです。少しもむずかしいグループではありません。

一人で読んでいると、読みとりが主観的になりがちですが、集まって感想を話し合うことによって、作品を幅広く、より深く理解することになります。これがねらい

なのです。

しかし、実際の例会は、むずかしい話ばかりしているわけではありません。例会時間の半分ぐらいは、各会員の近況報告や身辺雑話など雑談に近い内容の話し合いで占められることもしばしばあります。それだからまた楽しいのです。どなたでも仲間になれます。気軽な気もちで参加してください。

こんな例会を昭和五八年四月から毎月一回開催しています。初め五人ほどで始めたのですが、一名、二名と増え、現在会員数は二〇名ほどになっています。例会には都合の悪い人もあって、毎月一〇名そこそこの参加です。読んだ本は三八冊になりました。今年の四月二〇日には、井上靖の「星と祭」の文学散歩で大津市坂本周辺へ二〇名ほどで出かけました。

昭和六〇年度の例会の記録

- 二三回 四・三 有吉佐和子 「香華」
- 二四回 五・九 林 芙美子 「めし」
- 二五回 六・元 松本 清張 「或る「小倉日記」伝」
- 二六回 七・三 五木 寛之 「蒼ざめた馬をみよ」

- 二七回 八・一六 遠藤 周作 『ぐうたら入門』
 二八回 九・三三 有吉佐和子 『女二人のニューギニア』
 二九回 一〇・二七 青木 雨彦 『遠くて近きは』
 三〇回 二・二四 滝口 康彦 『薩摩軍法』
 三一回 三・二五 野坂 昭如 『アメリカカひじき』他
 三二回 一・一九 立原 正秋 『春の鐘(上)』
 三三回 二・一五 ♪ 『(下)』
 三四回 三・二六 山下 洋輔 『ピアニストに御用心』
 (大橋 一二)

『星と祭』の文学散歩に参加して

山内 梅乃

四月二十日快晴の日曜日、前に読んだ井上靖著の『星と祭』の文学散歩に参加しました。コースは、作中に出てくる大津市坂本の盛安寺と聖衆来迎寺の十一面観音像の拝観と「鶴喜そば」を賞味することです。いざここに来て見るとなにか主人公になった見たいで、胸がわくわくして来ました。飾り気のない、それでいてまとまっていて庭。そんな中に十一面観音様は湖面に向って立っています。頭上に十一の小面をのせ、十一種の威力を一身

に表わし、衆生の苦悩を救済してくれる。衆生の苦しみや、悩みを救うことを自分に課しそれによって悟りを開こうとしている菩薩様だそうです。ふくよかな体つきに、かすかに笑っておられる姿は優しさと、心の安らぎを与える。にわかには信仰心がわき、眼を閉じ手を合す。作者の意図がわかる気がします。

また、この散歩に参加したおかげで、作中にない所もいろいろ見学出来ました。盛安寺の近くに建つ辻堂。敦賀に通ずる街道脇で、伝教大師と懸衣翁さんたちが祀られている。死後三途の川を渡るとき、衣類や持物を取れないように、六文銭を奪衣婆さんに渡すのだそうです。恐いお顔の婆さん、もよく見れば愛敬のあるどこにでもいる婆さんに見えます。死後も安心して通れそうだ。生きてる間に渡しておこうと賽銭を弾む。こんな素朴な辻堂が村の人達によって守られていました。又この辺りの石垣は穴太衆積みといって、自然の石を加工せずに積み上げるものだそうで、苔の生えた石垣の表面は、幾可学的な模様を作り出し、コーナの美しさは美事なものでした。素晴らしい石垣の続く道。桜のちらほら散る狭い歩道を滋賀院に向って進む、映画の中の悲劇のヒロインに

なったようで急にすまして歩いて見たり……人の話し声にふと自分に帰ってがっかり。

おいしい「そば」に舌鼓みを打ち満開のしだれ桜をバックに写真をパチリ、どちらが花か？ 文学散歩もどこへやら、時のたつのもわずれた楽しい一日でした。今日この計画をお立て頂いた大橋先生、行く先きまで、丁寧な説明や持て成しを頂いたこと先生のお人柄によるものと感謝いたします。琵琶湖にはまだまだたくさんのお観音様が祀られている、とのこと私もこの小説にあやかって観音様を訪れて見たいと思います。そうすれば人生何か得るものがあるように思います。

短歌会

中年のおじさん、おばさんの詠む歌は、花鳥風月や肉身のあれこれだけであるべきでしょうか？

わが平城N・T短歌会のオールドお転婆ギャルの発案で、只今われらの短歌会は、「相聞歌」「恋歌」の発表が面白いしております。「うふふ」「ウハア、ホントウ？」と時

ならぬ嬌声も湧いて、真偽とりませた愛の歌がはらんとしているのであります。

第三十八回（61年6月例会）から、左門先生の麗令夫人、われらのアイドル環先生も参加して下さいようになり、第三十九回例会からお歌も出品していただいております。さすがに年季の入った濃艶な相聞歌もあり、「ああ、嘘でも良いから、（本当なら、なお良いけれど）こんな恋をしてみたい」と会員各嬢のため息をさそっております。

歌は、互選で、各歌の得点はその場で発表があり、歌に対する賛否の感想を各々述べあいます。最後に左門先生の文法をきっちりとおさえた御批判、御添削があります。歌の内容に関連して時にはその驚くべき該博な知識の一端を披露して下さいこともあります。環先生からも会員の個性に合わせた愛情あふれる添削がいただけるのです。一方、会員各嬢の批評は、独断と偏見にみちみちて、あまりの事に作者がたまりかねて反論したりして、会場が大爆笑につつまれることもあります。

会員は、何分中年のこととて、本人や家族の病気等で残念ながら中休み、退会をよぎなくされる方もあり、又、

新会員も加わって皆々元氣百倍、新しい雰圍氣が会の活氣をもり上げたりしています。只今会員は八名、小じんまりとまとまり先生の御批評や解説を丁寧にしていただけるちょうど良い人数なのですが、一方、新しい傾向のお歌も見せていただきたいので新入会員はいつでも大歓迎です。

皆さん、毎日の暮らしの中で、野菜はどこの八百屋に行けば安いか、魚はどこの店が新しいか、そんな知識だけで淋しくはありませんか。ほんのちよっぴりでも、まだ美しいものに感動出来る心が残っていらっしやるなら、あなたも一ヶ月にたった一日だけ詩人になってみませんか。私達もまだまだ素人です。首折れ、腰折れ、脚折れの珍妙な歌もあります。今はそう、でも目標は、みんな岡本かの子か、与謝野晶子か、この年でもまだ成長し、進歩する可能性が残っているなんて、なんとすばらしいことかと思っております。若い方、心の若い方を当会では心よりお待ちしております。

(山元 洋子)

古代史講座

月一回の勉強会をやっています。いつも出席して下さるのは一〇〜二〇名のあいだ。入会随時ですから、古代史の話を聞きたい、しゃべりたいという方があれば、いつでもおいで下さい。三〜四回に一度は現地学習会と称して、飛鳥や多峯山、山辺道など歩きながら、しゃべりにいきます。今のところ、勉強の中味は、お寺シリーズで、南部の諸大寺の歴史を一つ一つ勉強しています。勉強会も、それほどかたぐるしいことはないと思っております。話がはずむと、どこまで脱線するかわからなくなる時もあります。

(鬼頭 清明)

詩吟の会

文化協会詩吟の会も、順調に三年を経過しました。小じんまりとした地道な会ですが、知らぬ間に会員も一人、

二人と増え、目下、常時出席される会員は女性ばかり八人を数えることとなりました。

テキストの枚数も紙挟みが苦しいまでに膨らみ、これらの吟題を全部消化出来ていれば大したものですが、中々まだ／＼その域には程遠いものを感じます。

この他にも、万葉歌の朗詠も教わっています。千二百年以前の万葉びとのおおらかな、そして、みやびやかなやまことばの美しい韻律は、また詩吟の力強い音律とは全然違った音域で、ひとしお奈良に住む者の心を打ちます。われもまた、やまとくにびとと実感出来るひと刻です。

尚、今年六月に開催されました奈良県詩吟連合会の各流派の競吟会には、わが協会詩吟の会よりも光栄ある代表選手を一名送り出すことが出来ました。

堂々たる吟声で聴く者を陶然とさせて下さる方です。

まだ／＼若手の方ですので先生のご指導にも熱が入り、きつとすばらしい吟道の星として成長して下さいと、共に机を並べて教えを乞う同期生一同、大いなる期待と声援を送っているとどこぞでございます。どうか一度、私達の勉強振りをご見学にお越し下さいませ。(木村 長子)

俳句基礎講座

昭和五十八年の発足当初は、十人前後であった会員が、昨今では、多いときには二十名に及んで、先日の「文化協会報」にも書きましたように、自分の「生き甲斐」になる「創る文化」に取り組んでおられるのは、本当に嬉しいことです。また私の他女性ばかりであった会員も、今春からは、副会長の松岡さんを迎えることができ、先月も男性の新人を迎えるなど賑やかになりました。

毎週第二土曜午後二時に、北部出張所会議室に集合、持ちよった俳句を清記したものを回して互選。幹事の方がひとりひとりの選を読み上げたあと、選者の選と特選の披講、選評があります。そのあと昨年から始めている「〇月の俳句」(その季節の秀句十句のコピー)について選者の解説があります。会員の中にはかなりの俳歴の方も少数あるのですが、選評も解説も、初めての方にもわかるように平易にしているつもりです。初めて参加の方は、俳句を持たずに来て、見学されるだけでも構いません。

ん。是非いつからでも、とりあえず「ひやかし」に来て下さることをお待ちしています。(会費はコピー代と紙代二百円の他は一切不要です)

(牧野 春駒)

絵画クラブ

(活動状況)

- 現在会員数は、約二十名、
- 週一回(第一・三 火曜日 AM十時～十二時
第二・四 土曜日 PM二時～五時)
- 北部出張所会議室に於て、
- 水彩で、題材は、主に静物、時に人物を、
- 寛 裕先生に御指導頂いて、描いています。
- 61年春には、奈良公園に、写生に行くこと二回。
- 又、例年、春休み、夏休みに、油絵の集中講座を、梶野哲先生の御指導のもと、開いています。今年度は、春休み(三月末に四回) 点描画に挑戦、夏休み(七月末に五回) 思い／＼の題材を自由に表現しました。

○文化祭の展覧会では、一年間描きためた中から、各自、二・三点を発表しています。

ただもう描くのが楽しいという気持が、全作品に共通して満ち／＼しています。御高覧の程を、

(高橋 節子)

七十の手習

白松 春子

昨年の七月、文化協会に入会して早や一年が、たちました。

寛裕先生の指導のもとに、楽しく絵筆をとらせて頂き、多くの若いお友達が出来、年を忘れ時間のたつのを忘れるひと、きです。

一つの物を見ても、たゞ見ているのと絵筆をにぎって描こうとしてみたときとではこうも違うものかと、始めて知る事が出来ました。

絵を描く事は、ちよつとした暇を見つけて手軽な素材であっても、その材料によつては、美しい作品が身近に感じられる事があり、楽しくなります。

先日も寛先生が「玉葱のたばねたのを描くと面白い作品が出来ますよ」と云われたのにヒントを得て、手作りの玉葱がかげ干にしてあったので、早速半日が、りで書き上げ、次の週に先生に見て頂きましたところ、大変、ほめて下さいました。下手な絵でも、ほめて頂きました事は、はげみにもなって、嬉しく思いました。

又今日(七月十三日)左京地区の副会長の奥様が、家へご挨拶にお見えになって、「お酒や、食料品の店を、開店しましたので宜しく、先日白松さんに書いて頂いた額縁の絵、早速店にかざらしてもらいました。見に来て下さい。」との事、孫を連れておよろこびがてらお店の方へお伺いしました。七十の手習いで、お祝にさしあげた自分の下手な絵が、額におさまると様になってよく見えるのは不思議、皆様によるこばればと、何かほの／＼とした温い気持で帰って来ました。

日本文化のふかいふる里奈良に在住して、三年思いもかけず絵筆を持つ事の喜びを味わせて頂き、これからも一枚でも多く自分なりに楽しく、細く長く勉強してゆきたい念願です。どうか今後共よろしくお願い申し上げます。



奈良二月堂付近にて写生

拓本を楽しむ会

「層富」の前号では昨六十年五月例会までのグループ活動をレポートしているのでその後の歩みを月を追うて記すこととする。無味乾燥の嫌なきにしもあらずで乞うご海容。

六月九日(日)三輪神社方面へ三人、桜井市水道局周辺に三人と分れて採拓した。

七月七日(日)市水道局周辺と相撲神社方面に分散採拓。山辺の道の南端と北端である。

八月四日(日)暑さのため北部出張所会議室で文化祭出品のメインテーマを「山辺の道」とすることを申し合わせた。その外展示用パネル、額等につき情報交換。喜多正恵さんの入会あって総勢十人の会となる。桜井市観光課編集の「記紀万葉歌碑解説書(仮称)」を中村さんがコピーし全員に配付された。ここに記して中村さんに感謝申し上げます。

九月一日(日)団地集会所和室で画仙紙を持ち寄り有

料頒布をした。なお桜井市観光課が発行した歌碑のカラー絵葉書を一括購入することとした。入手後七日に全員に配付した。

九月八日(日)今月から例会を第二日曜開会とした。桜井市水道局等三方面に分れ採拓。

九月二十三日(秋分の日)文化祭実行委員会で拓本の展示は、十一月十四日(木)から十七日(日)までの間、北部出張所会議室の和室と決定された。当日会の名前で網干会長さんに三輪神社境内の黛敏郎書になる音符入り歌碑が採拓できるようお願いの文書を出した。

十月十三日(日)文化祭の拓本出品の搬入撤去について打ち合わせをした。

十一月十四日〜十七日 拓本は会員全部からの出品があり総数二十七点を数えた。

十一月二十三日(勤労感謝の日)会長さんのご配慮により六名が三輪神社に参拝し、黛敏郎書の歌碑を白衣着用の上採拓した。第二陣は翌二十四日採拓の予定であったが生憎雨のため止むなく中止となった。

十二月八日(日)文化祭の反省と来年の採拓テーマを「山辺の道」及び「盤余道」とすることを申し合わせた。

昭和六十年一月十八日(土) 中華料理店北京で新年宴会、総勢八人の出席、会が発足してから初めての宴会で二時間余り楽しく歓談し盛会裡に終わった。なお一月〜三月まで例年通り例会を休むこととした。

四月十三日(日) 本年第一回の採拓。朝倉駅下車、慈恩寺附近で採拓、総勢四人。採拓後全山これ椿の山に登って一時を過ごした。

五月十一日(日) 朝倉駅で(株) コミニケの野村プロデューサーと落ち合い、No 23の保田与重郎書になる雄略天皇歌碑まで同行した。参加者六人。スナップ写真とグループ活動の記事が五月三十日の朝日新聞に掲載された。六月八日(日) 総勢三人であったが朝倉駅から桜井市立東中学まで足を伸ばして採拓。

七月十日(日) 例会日であったが雨のため残念ながら中止した。

以上で一年間の活動記録を終る。

(渡辺 亮斗)

囲碁同好会

日本古来からの伝統が少しづつ失なわれつつある今日、囲碁人口は全国二千万人ともいわれ隆盛を高めている。

いったい碁の魅力とは何なのであろうか、何時ごろから日本人の心をとらえるようになったものであろうか。

用具にしても、ルールにしても、極めて単純簡明でありながら、その打碁は変幻万化である。

盤上の石の配置を見て、どこにどのような手があるのかは、プロの初段であればすべて判る。

しかしそのうちの一手を選ぶのが芸であると言われるが、一手一手打ち進められ最後までバランスをくささず打ち上げて行くプロの碁はまさに美学である。

碁士はその極地を求めて、鎬をけずる。

その点アマの我々は気楽なもので戦いの好きな人、地取の得意いな人、それ〴〵楽しみを満悦しながらゲームできるからである。

碁の別称で“手談”という言葉がある。

お互に一手一手打つことにより、もの言わぬ相手に語りかけて行くことから来た表現であろうが、味わいの深い言葉である。

初対面の人とでもこの手談により旧知の友のごとくゲームを楽しむことも出来る。

まさに囲碁を楽しむ者のみに与えられた特権ではなからうか。

当囲碁同好会では、例年の行事としては、春秋年二回行われている。奈良市公民館対抗囲碁大会への参加、その他新春囲碁大会の開催、秋の文化祭参加行事としての市長杯、教育長杯、争奪囲碁大会等各種の大会を実施しております。

特に本年三月より二ヶ月に一度の奇数月の第一日曜日には、今回奈良県下では初めて誕生した女流棋士である関西棋院の荒木真子初段をお迎えし、指導碁をお願いしております。

会員の實力も高段者から初歩の方まで多様な構成となっており、どなたが参加されても楽しく打って頂けることと思えます。

毎週日曜日に行われている例会には約三十名程の会員

で賑いをみせています。

囲碁に興味をお持ちの方はぜひ参加下さる様お待ちしております。

(中村 正雄)

地酒を味わう会

文化協会発足と同時に同好会の一つとして結成され、今年の六月七日の例会で三十六回を重ねました。

会員全員が社会の第一線で活躍しておられる関係で、月例会の出席率も五〇〜六〇パーセントと低いのも仕方ないことだと思っております。それでも、だいたい三ヶ月に一度はお会いするような形になっております。

まことに良い親睦の場であり、あらゆる社会情勢を知り得る機会でもあり、的を得たコミュニケーションの場でもあります。

なかには呑んべいの集まりでくだらない会くらいに思っておられる人もあるでしょうが、大きな誤解です。勿論、会の名称が「地酒を味わう会」ですからお酒が出る

のは当然ですが、会員の皆さんは良識者ばかりです。ほどよくアルコールが入ると、話題は豊富で、多岐にわたるなど、時間の経つのを忘れ、また、時には歌の一つも出てくるなど、時間オーバーに気が付いて匆々に閉会を宣することもしばしばある始末です。

しかし、和やかな、気楽な会です。気軽にご参加ください。

さいごに六十年年度の例会の記録を紹介します。

六〇年四月二四日 宝山寺洗心閣一泊

五月一日 味杉にて

六月 八日 中村氏宅でさつき観賞

七月二三日 納涼・宝山寺洗心閣

九月一四日 味杉にて

一〇月二二日 同

十一月 九日 浜口氏宅で観菊会

十二月二一日 「ちどり」にて忘年会

六一年一月一八日 味杉にて新年宴会

二月 八日 生駒市上田酒蔵見学

三月一五日 大阪南「魚利」にて (吉田 篤史)

随 想

白 子 明

平城ニュータウン文化協会の傘下に、「地酒を味わう会」があります。まことにユニークな会であり、名であります。ただ集まって酒を飲むだけではないか、それは日常茶飯事の行為、飲酒がなんで文化と関係があるのかと、疑問をお持ちのむきもあろうかと思いますが、まあ終りまで読んでください。

戦後は市販の酒が、大蔵省の強力な指導のもと、色々の添加物が混入され、いわゆる三倍増醸酒（アル添酒）、本来の酒とは程遠い、アルコール飲料と成り果てたことは、皆様ご案内のとおりであります。「悪酒は悪人のごとし、相攻むること刀箭うちやえより劇はげし（宋・蘇軾）」。

ちようど私がこの土地へ移り住んだころ、文化協会が創立され、そのなかに「地酒を味わう会」が設けられたので、おそらく美味しい地酒を楽しませてもらえると、大きな期待のもと入会したのですが思惑はピツタリの中、世話役のかたがたのお骨折りにより、各地の有名地酒を

例会ごとに堪能たんのうさせていただいております。その芳醇な各地の地酒を飲みくらべ味わうこと、これまさに味文化といえるでしょう。

まず例会のふんい気をご紹介しましょう。初めは慎重にその銘柄や産地などを聞きながら、おもむろに口に含み、甘口だ、いや辛口だと批判しているのですが、量が進むに従って、舌が麻ひしてくるし、酔が廻って来てただの酒仙となりさがります。しかし、酒は心の玉ははき、話題豊富なかがたが多くおられ座が弾ずみ、一大社交場となるのであります。

春五月には会員N邸宅において、「さつき盆栽」を愛で、秋には観月を兼ねて公園での野外バーベキューや、H邸宅での観菊会と、またときには会長が常々信仰している生駒の聖天さんの宿舎（通常は宿泊施設ではないのですが「洗心閣」で、一泊しながら大和平野の夜景を眺望し、冬には酒蔵見学と趣向をこらして、文化協会創立の趣旨である親睦を深めています。

貴方も、貴女も（女性会員もおられます）成人ならばどなたでも、是非一度参加されてはいかがが？ 臨時参加大歓迎！すぐ仲間になれること請合。

ニュータウン親睦の「輪」を上げましょう。

酒は能く百慮を払い、菊は解くよく頽齡たいれいを制す。（陶潜）

木目込人形・押絵同好会

文化協会で活動させて戴くようになって三年目を迎えます。当初三名からの出発が常に十名を超える迄になり、会員が増す度に平均年齢が著しく上下するのがわがグループの特徴でしょうか？

母と娘ほど年が違う仲間が和気あいあいの内に、朝十時から二時間半ほどあーという間に過ぎてしまいます。同じ材料でも作り手の大事に心を入れるところ、布地の扱い方で、人形の表情や出来上りに、少しづつ異なる味わいと発見があるのに、出合います。

地味ながらゆつくりと、丁寧に、気持を込めて作り上げる手作りの楽しさは初めての方でも、グループのメンバーの気取りのない人柄に加えて、十分味わって頂けると確信致します。月の第一と第三の水曜日午前中、一度

北部出張所へ、お立寄り下さい。

(谷口 直子)

園芸の会

春には春の花を見て、夏秋の花を思い、秋には菊の薫の下で春の花を思う。園芸、それは変化に富んだ四季の営みをこの手に受けて、人生の友とすることにあります。

禪の言葉に「花を弄すれば香衣に満つ」とありますが、土をいじり丹精を込めて花を待つ、花が咲けば神仏に供えたり人にも見てほしくもなります。一輪の花は鳥を養い虫を育て、幼な児も含む総ての人々に好ましい情感を育ぐくみます。花を手にする度に漸様に考える訳ではありませんが、禪者はこれを「香衣に満つ」と表現しました。

飽食の時代にあつて、今こそ心の充実と言う無形の財宝への選好が、大きな社会現象となつて、教室は花盛りの観がります。

しかし、花作りは昔からあつた訳です、尤も花は先祖

を供養し、神の恵みに感謝をこめて供える花でした。それは丹精といふ真心をお供えした訳です。

花作りには継続した努力が必要です。昔の人はこれを丹精と簡潔に表現しましたが、私は、中国の人々も日本人も共に農耕民族であり、その繊細な神経感覚が漢字表現となつているのだと思います。庭園、盆栽を頂点とする園芸も民族の感性そのものです。

供花、供物の意識は薄くなりましたが、丹精込めては、今も昔も変わりません。

有り余る緑の恩恵も、いざ手元に置いて育てると、これが案外むずかしく、夏の猛暑と冬の寒さに加えて病虫害、肥料も過ぎれば根焼けをおこして駄目になり来る年も又来る年も試行錯誤の繰返しで、人間もだん／＼練れて、先の香衣に満つとなるのでしょうか。

例会ではその時季の園芸よもやま、庭木、蔬菜、草花、鉢物、盆栽等々実習を交えての数時間です。六〇年度は冬は冬眠で例会も休みましたが、冬には冬の仕事がある訳ですから出来れば継続開催としたいものです。

茶道では床の掛物に「千秋楽未央」を掛けることがあります。年を経ても常に未だ央の気持が大切です。来年

もまた新らしい花を手にすることが出来る。

園芸の楽しみこそ醍醐味たる由縁です。

(北村 孫衛)

野草の会

「文化協会の新聞を発行するので野草の会より何かのせることはありませんか」という電話がありました。かねてより一度会を開きたく思っていましたので二十七日に開きます。とお返事しました。そのころこの日が綱干先生の御陵めぐりと同じ日になると思いませんでした。新聞を拝見して行事が重っているのに気がりましたが、今更かえる時間ありませんので二十七日に開きました。

会を開くとなるとそれまでの準備が大変で本当に縁の下力持ちで外に見える苦労はほんのわずかです。その苦労と感想を述べてみたいと思います。いろいろあります野草の中で、この町に生えている草の名を正確に調べて会員さんに覚えてもらう為わたしは駅から家までの間にある草を注意深く毎日毎日観察し、わからぬ草があると、

採集してすぐ家とか学校で図鑑によって調べております。知っているのが十とすれば、不正確なものが十あつて生えている草の中半分ははつきり言えぬものがあります。またその草が一ヶ月もすればすっかり種類がちがつてきていますのに驚かされます。先日まで見られたチガヤ、

白いふさふさした毛の上に茶色の殻をつけて土手一面に風になびいていた草が今ではすっかり姿を消してしまっています。白い美しい菊のような花を咲かせていたヒメジオンも殆んど見えなくなり、せいたかあわだち草がひとり大きくぐんぐんと伸びています。まつよい草もその間をぬうようにして大きく育って花をつけています。

こうして二ヶ月近くしらべた草の名をプリントして二十七日にお渡したのですが、約百近くありました。その中で特に目立った可憐な草花がありました。わたしの庭の芝生に二十本ほど咲いていました振花です。昨年はそんなに咲いていなかったのに今年はやつとした芝生の中にピンクの美しい二十cmぐらいの細長い草花が特に目につきました。

会のためと思つて色々な草を集めていましたのでこれは珍らしいと思つてぬき取つて家内に大切に残してくれ

るように頼んでおきました。不思議なことに二十七日の朝日新聞にこの振花のことが載っているではありませんか、可愛い花が色つきの写真入りで説明されました。「ねじばな」といい別名「もじりぐさ」ともいいこの花は小さくともラン科の一種で、じつくりながめると一つ一つがランの花であることがわかります。

振花のまことねじりたるかな

草間 時彦

まつすぐの茎に振るる花として

江口 竹亭

句の通りで、まつすぐに伸びた茎に螺旋階段のように二回か三回転して五十箇ほどの花が咲いてその色が本当に美しい。その他今咲いているつゆ草も、またこれから咲く、あざみや、たで等々みぞそば、草の花も自然の美を競っています。特にこのニュータウンは緑が多いので健康にも心のやすらぎにもよい町だと思えます。

(前川 良雄)

秋の七草

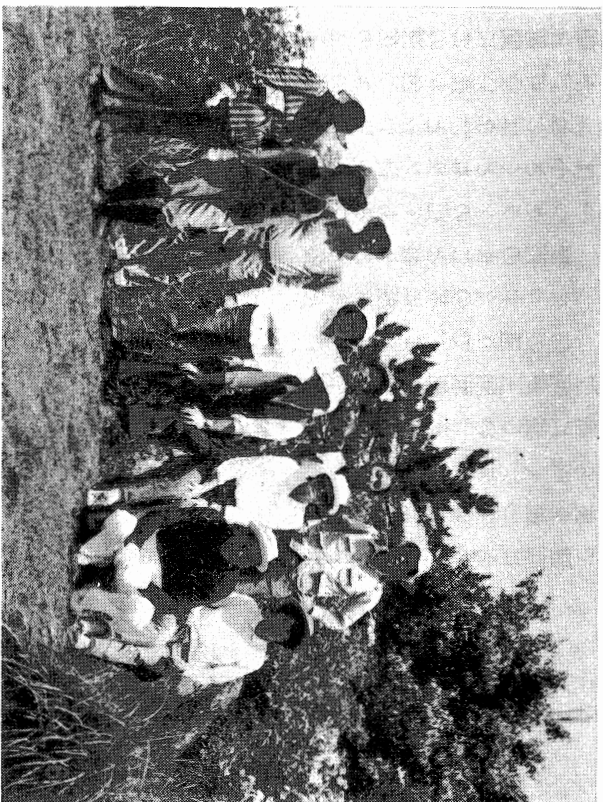
秋の七草は、万葉集に山上億良が「秋の野に咲きたる花をおよび折りかきかぞふれば七種の花」八萩の花、尾花、葛花、なでしこの花、おみなえし、藤袴、桔梗の花とよんでいるところから人々に印象づけられている花である。

それは春の七草に対比されるが、春の七草が一月七日に七種の菜を入れた粥をたいて食べ、折るのに対し、秋の七種は見て楽しむものである。

一説に、奈良時代は桔梗のかわりに朝顔を入れた、という。



(平凡社：世界大百科事典より)



山歩きの会

今年四月二十九日山歩きの会を発足してはや四ヶ月になりました。これも会員の皆様方の御協力をいただき厚く御礼申し上げます。

才一回目は紀伊と河内の国境に美しい山容を眺かせる和泉山脈の秀峰である岩湧山に行きました。登り初めの頃より雲が厚くたれ下り途中で雨に降られ大変な目にあいましたが参加者全員は楽しい一日を過しました。才二回(神野山)才三回(比良山)と回を重ねるごとに参加者が増え私達はうれしい悲鳴を上げている所です。

皆様方も是非参加していただき私達と一緒に山登りして楽しい一日を過して見ませんか。最後に山歩きの会の才一の目的は健康増進とレクリエーションを目的としています。今後のスケジュールは次の通りになります。

九月 六甲山 十月 俱留尊山 十一月 愛宕山
十二月 生駒(石切より) 一月 金剛山
二月 高見山。 二月 柳生街道。

毎月の行事日は才二日曜日としております。

(西幹 友雄)

文化祭 記 録

第三回文化祭

十一月十日(日)午後一時から、右京小学校体育館でのイベント。映画より始まった上演の部は、出演者それぞれ熱演の発表がくりひろげられた。孝田先生(平城西中学校校長)の口演童話は二月堂そばの杉の木の話。聞く人をひき入れる。次いで詩吟の会の皆さん、目を閉じ吟題の意味を想像しながら、うっとり聞きほれる。発表は静から動へと続く特別発表のジャズダンスとケン玉クラブ演技をする子供たちは真剣そのもの、それを見入る客席と指導の先生、うまくいったら思わず拍手。最後は会場全員で歌う、童謡や歌謡曲の素晴らしいハーモニーで幕を閉じた。

副会長の松岡礼一先生の閉会のあいさつでオ三回文化祭を終った。

上演の部

◆映 話 「仏教伝来と半跏思惟像」

◆童 話 良 弁 杉 孝 田 有 禪

◆詩 吟 白 帝 城 白 松 春 子

常盤雪行 春 田 良 子

白 帝 城 三 木 静 子

偶 成 櫟 原 キ ミ

金 州 城 久 門 富 美

◆ジャズダンス 指 導 新 山 洋 子

フラツシユダンスのテーマソング

今夜はチエーまでロックンロール

◆ケ ン 玉 指 導 新 田 千 代 美

◆詩 吟 重 奉 母 遊 吉 野 (二) 辻 田 し ま 代

出 郷 作 伊 藤 喜 美 子

白 帝 城 大 迫 く き 枝

偶 成 青 山 浜 子

常盤雪行 木 村 長 子

弔小楠公墓 永 原 寛 子

九 段 桜 岩 井 あ さ 糸

峨眉山月歌 中川 富美子

題不識庵擊機山図 後藤 のぶ

平泉懷古 柏木 一枝

幾山河 景山 知子

九月十三夜 内田 律子

獄中作 植田 浩

舟中聞子規 西峯 堤 暁

山行 吉本 堤 幸

九段桜 吉本 堤 瑞

謡尾驚節 谷口 静子

◆民 う た みんなで歌いましょう

指導 田中 美智子

ピアノ 高橋 三千子

展示の部

(順不同、敬称略)

◆書 道 川口勇、川口貞子、中西八代子、坂口

修一、鬼頭かづみ、田室利雄、鈴木玲子、竹本千鶴子、

宮本郁江、保田理恵、石崎敏子、岡島藤子、飯田嘉子、

池端純子、辻中香世子、富田純子、村岡敏子

◆拓 本 渡辺亮斗、大山美寿栄、中村正雄、寛

祐、盛田桂子、鈴木玲子、近藤義敏、喜田正恵

◆短 歌 左門璃晃、大浦小夜子、岡田越子、木

庭和子、木村澄子、久門富美、永田喜一郎、宮川恵美

子、山元洋子、吉本郁江

◆俳 句 牧野春駒、牧野和代、牧野友美、三井

サチ子、西山佐代子、永谷秋乃、永原寛子、柏木一枝、

喜田まさ、廣田春、木村長子、川口シズエ、森村和枝

◆絵 画 寛祐、梶野哲、白松春子、長谷川咲子、

松本芳子、宇野木久代、古川千鶴子、仁科里子、山田

寿郎、山田正子、山田敦子、服部純世、沢田律子、高

橋陽子、佐々木のり子、上田千栄子、高丘和子、高橋

節子

◆工 芸 菅原静子、伊藤喜美子、林田メ子、奥

島公子、木村長子、奥野昌子、村岡敏子

◆園 芸 北村孫衛、岡田越子

一九八六年度總會

六十一年度總會は五月五日、午後一時から、奈良市北部出張所会議室で開かれた。例年四月開催の予定が、諸般の事情で遅れ、多雨の連休最後の休日とあつて、好天が災いしたのか、参加者六十余名と、発会以来の寂しい總會となつた。

然し少ない出席者乍ら、協会運営への熱意に溢れ、会計担当の林氏から、会費についての要請等にも質疑がなされ、会長の断で、年会費は現状維持と決まつた。

特別講演は、先頃北朝鮮の招聘を受け、彼地を廻られた、網干会長の「高句麗とその文化」。(詳細は別項)スライドをみながら北朝鮮の最新の国情等、楽しく、充実したお話は少人数で聞くには惜しく思われた。

一九八五年度事業報告

三年目に入った文化協会は、転居等による会員減を上回る新入会員を迎え四四〇人の仲間の集うグループに発展しました。

各講座・同好会は担当の先生方のご尽力により、会員諸氏の生活の一部となる迄に定着しています。ニュースは月一回のペースで、会報は「入会のおさそい」と「文化祭のお知らせ」と二回、発行出来たのは大浦小枝子編集長の大へんなご努力の結果です。

会誌「層富」二号は、創刊号と同じく大橋一二編集長、内田和夫次長他の皆様と若草技能訓練所(印刷所)の方々のお蔭をもって、九月にようやく発行出来ました。内容は大変好評であり感謝しております。

セミナーは三回、他に總會と文化祭との記念講演で、内容は次の通りです。

▽ 總會記念講演 「古代と現代」

関西大学教授

網干 善教会長

▽ 第十三回セミナー「文字の楽しさ」

日本書芸院審査員

木原 研石先生

読売書法展評議員

▽ 文化祭記念講演「考古学から見た戦争の歴史」

奈良国立文化財研究所 佐原 真先生

▽ 第十四回セミナー〈奈良市教育長退任記念講演〉

藤井 宗治先生

▽ 第十五回セミナー「二足の草鞋」

〈平城西中学校長退官記念講演〉 孝田 有禪副会長

第三回文化祭は、十一月に開かれました。例年通り、平城高等学校郷土史研究部、平城ニュータウン教育懇談会、右京バンビホーム父母の会等の協賛行事に加えて、「スポーツ写真展」が平城ニュータウンスポーツ協会との共催で開かれ、多くの応募作品が南都・住友両銀行のロビーを飾り好評を博しました。

見学会も活発に行われ、協会主催の「大和路見学会」の他に、「古代史講座の見学会」、「読書会の文学散歩」、「地酒を楽しむ会の酒倉見学会」、「短歌の会の吟行」、「拓本の会」や「野草をしらべる会」等が主なものでした。

又、会員の柴田八重子様のご指導で「新春のためのちぎり絵」講習会が年末にもたれましたが、これも手作りの楽しさプラス etc で大へん喜ばれました。不定期のこういった小講習会もこれからの活動の一つのあり方として考えられてもよいでしょう。

第三回目を迎えた「新年祝賀会」には、西田市長、岡嶋市自治連合会長を迎え、例年の如く各種団体との交流の場として、平城ニュータウンの年中行事のトップを飾る集いになりました。

「新春のカルタ会」も二回目。参加者は少なかったのですが、盛大？な笑声、嬌声に厳寒なんのそのといった小半日でした。

以上のように、各講座、同好会、各種行事も定着し、文化協会設立の主旨に沿った軌道を順調に歩んでいます。しかしながら、会員増に伴う運営の問題等々、いろいろな宿題も残りました。

特に反省を強くしておりますのは、各講座、同好会に対する協会事務局としての助力が全く出来なかったことで、連絡の行き違い等もあり、特に「囲碁クラブ」の皆様に対しては心よりお詫び申し上げる次第です。その他

にも色々ご迷惑をかけていることと存じますが、次の発展のために何卒、会員の皆様のご叱声とお智慧も拝借いたしたく宜しくお願い致します。

1986年度 活 動 日 誌

85.4.14 85年度総会	11.18 協賛展示 (教育懇談会)
5.10 ニュース①	” (平城高校郷土史研究部)
6. 2 第3回大和路見学会	” (右京パンビホーム)
6 ニュース②	30 ” (スポーツ協会)
7. 1 会報 (第3号)	23 第4回大和路見学会
17 ニュース③	24 文化祭閉会式
9.10 ニュース④	12. 5 ニュース⑦
30 「層富」発刊	25 ニュース⑧
10.10 ニュース⑤	86.1. 5 第3回新年祝賀会
15 会報 (文化祭特別号)	13 第2回カルタ会
19 古代史見学会	2.21 ニュース⑨
26 第13回セミナー	3. 8 第14回セミナー
11. 5 ニュース⑥	4.26 第15回セミナー
10 文化祭上演	
17 ” 展示	

1985年度 決算 報告

【収入の部】

項 目	予 算 額	収 入 額	差 引 増 減	備 考
前年度繰越金	121,774	121,774	0	
会 費	380,000	336,500	△ 43,500	個人正会員 336人×1,000 高校生会員 1人× 500
補 助 金	50,000	40,000	△ 10,000	自治連合会から補金
寄 付 金	100,000	0	△100,000	
雑 収 入	8,226	2,387	△ 5,839	南都銀行利 住友
合 計	660,000	500,661	△159,339	

【支出の部】

項 目	予 算 額	支 出 額	差 引 増 減	備 考
事 業 費	110,000	102,703	7,297	講演会、映画会、展示など
助 成 費	50,000	0	50,000	
会 議 費	30,000	0	30,000	
広 報 費	250,000	329,238	△ 79,238	会誌、議案書、ニュースなど
事 務 費	80,000	31,620	48,380	文房具、コピー代など
通 信 費	10,000	120	9,880	切手代
渉 外 費	30,000	5,000	25,000	橋本先生御香典
雑 費	50,000	5,990	44,010	
予 備 費	50,000	0	50,000	全額広報費に流用
合 計	660,000	474,671	185,329	

500,661 (収入額) - 474,671 (支出額) = 25,990 (収支残額) <<翌年度へ繰越>>

1985年度 会計 監査 報告

出納帳、帳票書類等監査の結果正確なることを認めます。

1986年 4 月 30 日

会計監査 野 村 信 治 ⑩

山 下 良 吉 ⑩

1986年度 事業計画

- | | | | |
|---------|------|-----|----------|
| I 講演会予定 | 5月5日 | 総会 | 記念講演会(特) |
| | 6月 | | セミナー ⑩ |
| | 7月 | | 〃 ⑪ |
| | 9月 | | 〃 ⑫ |
| | 10月 | 文化祭 | 記念講演会(特) |
| | 11月 | | セミナー ⑬ |
| | 12月 | | 〃 ⑭ |
- II 会誌「層富」第3号発行
- III 会報発行(年度当初・文化祭前の計2回)予定
- IV ニュース発行(隔月1回)予定
- V 第4回文化祭(10月～11月)開催予定
- VI 第3回各種団体交流会(9月頃)予定
- VII 大和路見学会 事前学習会(7月24日)
見学会(7月27日) 「佐紀路古墳めぐり」
事前学習会(9月頃)
見学会(〃)
- VIII 第4回新年祝賀会(1月5日)予定(従来通り地区各種団体との共催)
- IX 第3回新春かるた会(1月初旬)予定
- X 文化協会の宣伝ビラを全戸配布(6月初頃)など広報活動の充実
- XI 講座・同好会の新設計画予定。現講座・同好会への援助方法検討
- XII 各種団体との協賛行事(スポーツ写真展、等)
- XIII その他

1986年度 予 算

【収入の部】

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	25,990	
会 費	440,000	440人×1,000 = 440,000
補 助 金	40,000	自治連合会よりの補助金
寄 付 金	10,000	篤志家よりの寄付金
雑 収 入	4,010	預金利子 その他
合 計	520,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事 業 費	110,000	講演会、研究会、展示会 等
助 成 費	40,000	講座・同好会などで特に助成を必要と認められるとき
会 議 費	10,000	
広 報 費	300,000	ニュース紙、会報など
事 務 費	35,000	文房具、コピー代など
通 信 費	1,000	郵送費、電話代など
渉 外 費	7,000	渉外関係費
雑 費	7,000	以上各項目に予算していない経費の支払を必要とするとき
予 備 費	10,000	
合 計	520,000	

1986年度 平城ニュータウン文化協会・同好会一覧

電話局番＝㉞

記号	講座・同好会	担当者	電話	曜日・時間	会場
A	歴史教養講座 「古代天皇の系譜」	網干善教	6510	第2火曜(10～12時)	北部出張所会議室
B	古代史講座	鬼頭清明	2997	第3土曜日(14時～16時) 問合わせ 西島様(㉞) 1449)	〃
C	源氏物語研究	浅田知里	1258	希望者は電話で申込んで下さい	
D	木目込人形・押絵同好会	寺沢久美子	3972	第1・3水曜(10時～12時半) 指導・谷口直子先生	北部出張所会議室
E	野草をしらべる会	前川良雄	0682	春・夏・秋 年に3回程度	野 外
F	中国語講座	久富木幸子	5015	毎週月曜(15時～17時)	北部出張所会議室
G	囲碁同好会	中村正雄	0106	毎日曜日(13時～18時)	平城西公民館和室
H	読書会	大橋一二	4501	第4日曜(10時～12時)	北部出張所会議室
I	星を見る会	比下 享	3377	開催時、ポスター等で広報	〃
J	写真同好会	(梶野哲)	3295	希望者は電話で申込んで下さい	〃
K	詩吟の会	吉本音市	5036	第1・2・3水曜(13時～15時)	〃
L	地酒を味わう会	吉田篤吏	3600	第2土曜(19時半～22時)	会場未定
M	園芸の会	北村孫衛	0823	第3月曜(14時半～16時)	先生ご自宅 (右京4-28-2)
N	拓本を楽しむ会	渡辺亮斗	6817	第1日曜(10時～12時)	北部出張所会議室
O	アマチュア無線の会	浅田旭彦	1258	希望者は電話で申込んで下さい	〃
P	絵画の会	笈 裕	6295	第1・3・5火曜(10時～12時) 第2・4土曜(14時～17時)	〃
Q	公園を考える会	田中幸夫	1168	開催時、ニュース等で広報	〃
R	ワープロ教室	野村信治	1082	毎週火・金(13時～16時)	みどりの家会議室
S	大和路ビデオ鑑賞会	野村治樹	1082	開催時、ニュース等で広報	北部出張所会議室
T	音楽を楽しむ会	高橋三千子 宮崎孝明	3650 3815	開催時、ニュース等で広報	〃
U	俳句基礎講座	牧野春駒	1777	第2土曜(14時～16時)	〃
V	短歌入門	山元洋子	5138	第3火曜(13時半～16時) 指導・左門瑠見先生	〃
W	フォークギター講習会	奥 長生	0046	開催時、ニュース等で広報	〃
X	「子どもの生活」研究会	加藤育生 北村雅子	5223 0753	希望者は電話で申込んで下さい	〃
Y	フランス語講座	高橋節子	8253	希望者は電話で申込んで下さい	〃
Z	山歩きの会	西幹友雄	6102	第2日曜 (雨天中止の場合は第3日曜)	野 外

※ 現在開講中の講座・同好会のうち、中国語講座は途中参加は出来ません。また、担当者の都合によって 時に日時・場所の変更があるかも知れませんが、はじめて参加される場合は担当者ご連絡をとって下さい。

会 則

第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会とい
う。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表・知識の交換並びに会
員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場
となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、
地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために、次の事業を行
う。

- 一、講演会、研修会、展覧会、発表会、文化
講座等の開催。
- 二、関連文化団体との連携及び協力。
- 三、研究の奨励及び研究業績の表彰。
- 四、会誌の発行。

第三章 会 員

五、その他目的を達成するために必要な事業。

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、
協会の目的に賛同する者とする。会員の種別
は次のとおりとする。

一、正会員 年間会費一、〇〇〇円

但し、高校生五〇〇円

二、賛助会員 この協会の趣旨に賛同する者
で、年間会費五、〇〇〇円以上納める個人
又は団体とする。

第四章 役 員

第六条 協会には次の役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事
務局長一名、事務局次長一名、会計一名、理
事若干名、監事二名

第七条 理事は、正会員中より選出する。

- 一、会長、副会長、常任理事は理事の互選で
定め、総会の承認を得る。
- 二、事務局長、事務局次長、会計は理事中よ
り会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

第八条 四、監事は会員中より二名選出する。
会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当る。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九条 顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第一〇条 役員は任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠により選出された役員は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章 会 議

第一条 理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、

理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は、理事の二分の一以上出席しなければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第二二条 常任理事会は、会長、副会長、常任理事、事

務局長、会計によつて構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第二三条 通常総会は、毎年一回会長が招集する。

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたとき会長が招集する。

三、総会の議長は、総会出席者の中から指名する。

四、総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第一四条 次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

一、事業報告及び収支決算

二、会計監査報告

三、事業計画及び収支予算

四、その他理事会において必要と認めた事項

第六章 会計

第一五条 経費は会費並びに補助金、寄付金、その他の収入による。

第一六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章 会則の変更

第一七条 この会則は、総会の議決を経なければ変更す

ることができない。

第八章 補則

第一八条 この会則施行についての細則は、理事会の議決を経て別に定める。

第一九条 この会則は、昭和五十八年二月二十七日から適用する。

一九八六年度
役員名簿

会長

副会長

事務局長

次長

會計

常任理事

理事

網干善教
大橋一二
松岡礼一
梶野哲
木庭和子
林昭博
大浦小枝子
笥口裕
川口勇
鬼頭清明
此下亨
下條新太郎
高橋節子
田中幸夫
中村正雄
永田喜一郎

牧野春駒
宮川惠美子
山内梅乃
吉田篤史
浅田旭彦
内田和夫
太田豊臣
奥長生
皆藤るみ子
北川尚子
北村孫衛
北村雅子
木村長子
久富木幸子
小西正安
高橋三千子
高松美枝子
橙修造
橙公栄
樋泉俣子

監事
参与

西島芳子
辻井功
浜口光良
細田雅代
前川良雄
真鍋さとみ
光岡靖子
山元洋子
吉村惣五郎
吉本音市
渡辺亮斗
野村信治
山下良吉
山門璃晃
左門璃晃
谷口直子

組織部



編集部(層富)

林昭博
高橋節子
大橋一二
内田和夫
山元洋子
真鍋さとみ
梶野哲
木庭和子
木村長子
高松美枝子
山内梅乃
西島芳子
青島浩子
鈴木玲子
真鍋さとみ
山内梅乃
川口勇
岡田越子
吉崎三千男

(右京団地)

五丁目 吉田勝
神功地区 北川尚子
第一団地 北川尚子
一丁目 河村美智子
二丁目 井村孝子
三丁目 木庭和子
四丁目 高松美枝子
五丁目 川野直男
東浦洋子
西山佐代子
一丁目 山下英子
二丁目 新見和美
三丁目 小杉民子
四丁目 内藤貴代
五丁目 芦田宏子
朱雀第一住宅 樋泉俣子
中田光子
鈴木幸子

朱雀第二住宅

六丁目 永井圭子
芝田美代子
左京地区一丁目 松本芳子

配布委員右京地区

(ニュース会報)

二丁目

三丁目

四丁目

朱雀地区

一丁目

二丁目

三丁目

四丁目

五丁目

朱雀第一住宅

二丁目

三丁目

四丁目

五丁目